

## I. 本論文の目的

本論文の目的は、高知県窪川町（現四万十町）に持ち込まれた原子力発電所立地計画を人びとが如何に受け止めたのか、そしてその計画を如何に「もみ合い」、「もみ消した」のかを、フィールドワークとさまざまな文書に基づいて多角的に描き出すことによって、これまでの原発反対運動についての記述および「むら」についての記述のあり方を更新することにある。窪川の原発騒動も、政治学や社会学による市民社会論を基盤とした原発反対運動の記述では、外から持ち込まれた原発立地計画に対して、自立した個人が原発の危険性を自覚して反対運動に参加し、住民投票条例を作り追い返したと理解される。しかし、そのような理解からは、反対運動に参加した人びとの個人史の中での揺らぎや単独的な経験が無視され、つながりを大事にするためという反対運動への参加理由や、反対派と推進派の個人的なつきあいなどが、反対運動の論理や整合性と合わないものとして捨象されてしまう。それに対して、本論文は、反対運動に参加しなかった人びとや窪川の住民ではない人びとや人間以外の存在を含めた、さまざまな存在の関係性としての「むら」およびそれを基盤としてその外にもつながっている多層的な「邑」のあり方が、最終的に原発計画を拒否する力となったことを民族誌的に描くことで、「原発反対運動」ではなく「原発騒動」の人類学を目指す。

## II. 本論文の構成

本論文の構成は次の通りである。

### 序章

1. 2011年3月11日からの出発
2. 私自身の経験
3. 「放射能が手に届いた気がしたんだ」
4. 経験を重ね合わせる：アクチュアル人類学の視点
5. 2011年8月 旧窪川町の農村にて

### 第一章 原発反対運動の社会学から、原発騒動の人類学へ

1. 問いの所在：「原子力ムラ」をめぐる
2. 原発や関連施設をめぐる社会学：環境社会学、社会運動論、地域社会学
3. 本論文の視座：ムラ、むら、邑
4. 調査方法
5. この論文の構成

## 第二章 窪川原発騒動の顛末

1. 原発騒動の始まり
2. 窪川町長、藤戸進
3. 窪川原発反対運動
4. 町長リコールから町長選挙へ
5. 勢力伯仲のなかで

## 第三章 窪川のむらざとにて：人々の生業

1. 伊方：ミカンと原発から考える
2. 戦後の農政と、窪川農業の展開
3. 原発反対運動に参加した農民たちの生業戦略
4. 窪川町農村開発整備協議会
5. 小括

## 第四章 語りと余韻：島岡幹夫と邑の断片

1. 島岡幹夫の語り
2. 原発騒動まで
3. コバルト照射と母の死
4. 谷脇溢水の合流
5. 志和
6. 谷淵隆明と方舟の会
7. 島岡の引力と、その余韻

## 第五章 邑の象徴：野坂静雄とその精神の遍歴

1. 四万十川と地域史的個人としての野坂静雄
2. タービン技術者として
3. 窪川町執行部時代の野坂
4. 窪川農協組合長就任まで
5. ふるさと会会長野坂静雄
6. 野坂の死

## 第六章 原発計画をもみあう、原発計画をもみけす

1. 「むら」ということ、「邑」ということ
2. 土地基盤整備事業：国策共同体に抗するむら
3. もみ合う邑：住民投票条例の制定と温存する知恵

#### 4. 全会一致ということ：原発終結宣言

結びとして

1. 鶴津：沈黙する核心
2. 呼びさまされる記憶：戦後開拓
3. この人々の中にある歴史：地域史－世界史－個人史
4. 再び＜現在＞へ

### Ⅲ. 本論文の概要

以下に本論文の内容を要約する。

本論文は、高知県窪川町（2006年大正町、十和村と合併し四万十町）に持ち込まれた原子力発電所（以下、原発と略する）立地計画を人びとが如何に受け止めたのか、そしてその計画を如何に「もみ合い」、「もみ消した」のかを描出するものである。以下の調査で得られたデータが本論文を構成する。すなわち、2011年3月から行われる原発反対運動関係者を取りまく状況についての参与観察、同年8月から断続的に行っている現地調査、関係者へのインタビュー調査や現地で収集した反対運動関係資料調査、および国立国会図書館や高知県立図書館、四万十町立図書館を利用した資料調査である。

1970年代後半、四国電力は窪川町を愛媛県伊方町に続く第二の原発立地候補地とした。町長をはじめとする窪川町内の有力者たちは、原発に「過疎化の特効薬」としての役割に期待し、次第に原発誘致のために動き始める。町内では立地可能性調査の受け入れを嘆願する署名活動が始まり、実際の多くの町民が署名した。高知県知事をはじめ、県内の有力政治家も誘致に積極的に動いた。政府は科学技術庁長官を、与党自民党は幹事長を窪川に送り込み、原発誘致に動く人びとを全面的に支援した。

このような原発立地に向けた動きに対し、これに反対する人びとも動き始めた。計画が明るみに出してから8年間、原発の受け入れに反対する人びとは、たとえば保守と革新、農民と都市住民という枠を超えて、町内外の様々な経験を持った人びとのネットワークを構築し、原発計画に反対するための様々な活動を展開した。立地に反対する請願や住民投票条例制定を求める請願、町長リコール、町長選挙や町議会議員選挙での運動が行われる共に、原発をめぐる学習会も町内各地で活発に開かれた。

1981年、原発誘致に積極的に動いた町長はリコールされた。しかし、その出直し選挙では反対派が押す候補を破り、前職の町長が再選を果たす。当選した町長は公約としてかかげた住民投票条例を制定し、町内全集落での原発学習会の実施を企てる。一方、反対派も1983年、町議会選挙で議員を多数当選させるとともに、各集落で実施される原

発学習会では反対の論陣をはり町執行部と対峙した。やがて、国内の電力需要の低迷、伊方における三号機の着工、1986年チェルノブイリ原発事故などの国内外の情勢の変化や、立地地域の漁協による調査受け入れ拒否決議などがなされ、1988年に原発誘致に奔走した町長は辞職した。そして原発立地を棚上げにすることを公約にした新たな町長が当選し、議会も全会一致で原発論議の終結宣言を決議した。

「原発騒動」と現地では呼ばれるこの一連の過程について、「原発反対運動に参加した人びと」が外から持ち込まれた「原発立地計画」を追い返したと理解することは可能であり、実際そのような言説は枚挙に暇がない。しかし、このような理解にはいくつかの問題が存在する。一つの問題は、この理解では原発立地計画に賛成した住民や、原発立地計画に対して態度を明確に示さなかった人びとの存在は外部化される点である。実際に「原発騒動」期の記録を読めば、原発推進の側に立った人びとが原発反対派に鞍替えすることや、長期化する原発騒動に嫌気がさして原発論議の棚上げに動く場面にたびたび出会う。もう一つの問題は、この見方は原発反対運動に参加した人びとを、終始一貫して原発反対運動に没頭する主体として、あるいは学習によって原発の危険性を学び、原発がもたらす富を相対化する「自立した個人」と捉えてしまう点である。このとき、反対運動に参加した人々の揺らぎや彼らの個人史は、運動の論理と整合性が取れないものについて捨象されてしまう。実際には反対運動に参加する人びとも様々に揺さぶられる。様々な理由により反対運動から距離を置くこともあれば、敗北感の中で窪川からの移住を検討したこともある。反対運動に参加する理由も、一様ではない。反対運動の中心的言説と距離をもった理由によって、あるいは様々なしがらみ故に反対運動に参加した人もいる。原発反対運動のリーダーたちにも、反対運動を中心とする見方では見えてこない様々な前史がある。これら、窪川原発反対運動をめぐる既存の言説では零れ落ちるものこそが原発騒動という事件を理解する上で重要である。

以上の問題認識を踏まえて、本論文は人びとが原発立地計画を押し返したのではなく、原発立地計画に賛成する住民や、原発立地計画に対して態度を明確にしなかった人びと、そして窪川住民ではない人びとや、人間以外を含めた様々な存在による多元的な折衝——原発計画をもみ消す過程——として捉える。高度経済成長期後の国家の財政逼迫や、地方の過疎化が叫ばれる時代状況において、原発立地計画は窪川の人びとに状況を一変させる物語となり、人びとを動員していく。しかしその物語がもたらす未来像は、延々とした折衝の中で、リアリティを喪失していく。さらにこの一連の過程を理解するために、原発騒動以前の窪川の地域史や人びとの個人史の括弧を補助線として引く。その結果、原発騒動の経験を原発反対運動の一般理論に還元せず、地域に生きる多様な存在の固有の経験として記述することが可能になる。これは、とりもなおさず社会学や市民社会論が展開する反原発運動論に対して、文化人類学の多元的記述の特異性を

明らかにすることにもつながる。本論文が原発反対運動の社会学ではなく、原発騒動の人類学を標榜する所以である。

本論文の章ごとの概要は、以下のようになっている。

序章では、2011年3月11日以降の筆者の経験を語る。原発事故によって、放射能がありふれた存在になる中で、人々は世界を理解する手がかりを失い、様々なつながりから切り離される。そんななかで、世界を再び理解するための実践を行う科学者と、障害者運動のメンバーとの出会いに着目し、最初は緊張関係を孕んだ状態から折衝の過程を通じて、お互いの経験——放射能汚染の中で科学的知識を獲得するための試行錯誤と、30年前の障害者の地域生活運動草創期の試行錯誤——を「重ね合わせる」瞬間を描く。そのうえで、窪川町の原発反対運動のリーダーの一人と、東北の農業後継者が、当初、放射能汚染に対する認識が決定的に違うにもかかわらず、「変わらない生活を守るために闘う」という経験を重ね合わせていく瞬間を描く。ここにおいて、窪川の原発騒動をめぐる経験を過去の経験にするのではなく、今を生きるための知恵とする可能性が示され、そのための分厚い記述を提供するものとしてアクチュアル人類学が定位される。

第一章「原発反対運動の社会学から、原発騒動の人類学へ」では、既存の社会学（環境社会学、社会運動論、地域社会学）における原発反対運動をめぐる議論をレビューする。本論文は、これらの議論は、既存の地域共同体のしがらみから脱した自由で自立した個人が結びつくことによって、国策共同体によって進められる原発計画は拒否できる、と理解する点に限界を見出す。このように既存の地域共同体は不合理なものとア・プリオリに分類する枠組みを乗り越えるため、守田志郎らによって展開された村落社会論・むら論の再評価を行う。社会学による研究が原発を拒否する力を読みとることのない、「むら」の役割に注目する。それとともに、「むら」を理念的なものではなく、地域史の中に存在する流動的な実体として捉え、原発騒動という「むら」と国家が対峙する状況の中でそのあり様を記述する。伝統的生産・生活の単位としての「むら」と、「むら」の土着性を基盤にしなが、より開かれた存在につながっていく関係の様態としての「邑」を、本論文の分析枠組みとして導入する。その上で、本論文の調査方法を整理する。

第二章「原発騒動の顛末」では、高度経済成長の終焉と土建国家の誕生というマクロな時代状況を踏まえた上で、窪川原発騒動の経過を素描する。原発騒動当時を生きた人々の残した資料や語りが、手がかりになる。現在の時点から原発騒動を振り返り、そこで起きたことを時系列で並べていくという記述スタイルをとる。

第三章「窪川のむらざとにて——人びとの生業」では、原発騒動の時期にのみ焦点をあてる第二章のような記述からもれ落ちる、反対運動に参加した人々の一人ひとりの生活史に焦点を当てる。すると、多様な生業と生活のありようが現れる。反対運動に参加した人々を取り上げるが、運動への距離のとり方は多様である。彼らの生活史の記述は、運動

の論理を強化することになれば、逆にその論理を宙吊りにしてしまうこともある。その上で、原発騒動がやってくる以前から、窪川の農民たちが地域の仕事と暮らしのありようを議論してきた場である「窪川町農村空間整備協議会」に着目し、そこで育まれた思想が、原発計画に対する独自の視点を導いたことを論じる。

第四章「語りと余韻」では、原発反対運動の中心人物の一人島岡幹夫の語りに注目する。今なお饒舌な窪川原発反対運動の語り部である島岡の、その語りの〈余韻〉に耳を澄ませ、そこに反対運動の歴史の中で周縁化されてきた存在を感じ取る。窪川町に移住してきた人々、窪川町外から原発反対運動を支援した人々、原発騒動以前に世を去った人々、原発騒動の時期を生きた人間以外の生き物たちもが登場することになる。

第五章「邑の象徴——野坂静雄とその精神の遍歴」では、原発反対運動の最大の功労者と言われる野坂静雄の来歴に着目する。郷土を良くする会会長の野坂は農協の組合長や自民党の窪川支部長を務め、彼が反対運動に合流したことが「保守と革新」が手を結んだ象徴であると考えられてきた。また窪川の内発的発展を提唱した窪川町農村開発整備協議会会長を務めた野坂が、原発反対運動のリーダーとなることを多くの人は違和感なく理解できる。しかし、本論文が注目するのはそれ以前の野坂である。戦中までの浅野セメントのエンジニアとしての野坂、合併後の窪川町役場の幹部を勤めた野坂、そして窪川農協の組合長を務めた野坂のその遍歴を一つひとつたどると、原発反対運動のリーダーとして野坂が立ち上がる理由を探ることは困難になっていく。しかし、その困難の中にもこそ、原発反対運動において雑多な人々を決壊させない重石となった野坂の存在が濃縮した形で示され、また窪川原発反対運動がつかの間に作り出した共同性のありよう——「邑」——が指し示される。

以上を踏まえて、第六章「原発計画をもみ合う、原発計画をもみ消す」は本論文が提示する分析概念である自然村としての「むら」と、原発騒動の中でつかの間に生まれた異種混雑体としての「邑」がいかに原発計画をもみ合い、そしてもみ消して言ったのかを分析する。まず、原発騒動とほぼ同じ時期に展開されたほ場整備事業の意味を探る。これまで、むらの共同体も推進と反対で完全に二分されたという原発騒動についての説明が、筆者を含む町外の人々の多くによって、文字通り鵜呑みにされてきた。しかし、この説明の枠組みでは、なぜ同時期に行われたほ場整備事業が竣工までこぎつけたのかの説明できない。さらにいえば、この理解では、すでに書いた島岡と藤戸の和解も、2011年8月の島岡と東北の青年との出会いについても、限定的な理解しかできなくなってしまう。原発計画において、丁寧な対話プロセスの欠如があり、それが人々の反発を招いた。原発という存在への反発だけではなく、国策として進められる原発を地域にもってこようとする時に陥る決定のプロセスへの反発であり、怒りであった、と本論文は理解する。その上で、従来のむらを超えて多様な人々とのもみ合いを担保するために「住民投票条例」が構想され、またそれが原発問題を十分にもみ合うことを確保するために、最後まで使わなかった

という理解に至る。本当に画期的だったのは住民投票条例を制定したことではなく、制定した住民投票条例を使わなかったということであり、そこに至るまでの反対派、推進派、或いはそのどちらにも属さなかった人々の折衝こそが重要であるというのが、本論文の主張である。

結びとして、窪川町内の原発予定地でありながら、結局原発騒動の終結までほとんど着目されなかった鶴津地区、その傍らにある戦後の開拓農地、そしてパラグアイ移民の記憶を探り、地域の移動性を再度確認すると共に、彼らとの関係のなかに「邑」があることを指摘する。末尾に窪川原発騒動の経験を、原発事故後の世界で如何に重ね合わせることができるのか、福島 of 農村における経験や、障害者運動の経験、国会議事堂前の安保反対デモの経験を取り上げなら、そのための見取り図を示す。困難に直面した人々の〈生〉を、表面的な共通性ではなく、アクチュアルな地域史・個人史として感知できたときに、はじめてそれぞれの単独な経験に対して、自らの体験を重ね合せ、共感することが可能になる。本質的な意味での「社会」批判は、ここから始まる。人類学的探求や記述はそのための手がかりの一つでなければならないとして、論文を閉じる。

### Ⅲ. 審査結果

本博士論文の公開審査は、2017年2月21日（火）の午後3時～6時の間に、6号館402室で行われた。

審査委員からは、窪川の原発騒動以前の地域史と人びとの個人史、そして豚や犬を含むさまざまなエージェントの揺らぎを含んだ絡み合いを多層的に記述し、その地域史や個人史も窪川という地域を越えた、前史としての植民地や海外移民まで視野を拡げており、読んでも面白い多角的な民族誌として描くことに成功しているという高評価が出された。また、メディア等では「村や親族を二分する原発計画」と記述されがちな運動の最中においても、「むら」を多元的に見れば、同時期には場整備事業を行っていることや、原発推進派の事務局長と反対派のリーダーが一緒に森林保全運動をしているなど、けっして単純に二分されていたわけではないことを、多層的な「むら」と「邑」という分析的視座によって的確に記述されていることも評価された。そして反対運動に参加している人々の首尾一貫しているわけではない参加の仕方などをそれぞれの個人史として描くことや、住民投票条例を作りながら住民投票を実施しないことに意味があるという分析を提示することによって、市民社会論的な社会運動論に対する異議申し立てにも成功していると認められた。さらに、原発反対運動の論理や運動の整合性からは抜け落ちる個人の単独性どうしの多元的なつながりを捨象しない理論的枠組みや多層的なネットワークとしての地域を捉える枠組みの提示など、人類学に対する理論的な貢献も高く評価された。

公開審査では、審査委員からいくつかの疑問点や修正点も出された。ひとつには、多角的に描くという意図は認められながらも、書かれた個人史は反対運動の中心的人物に重点が置かれていて、推進派の人たちの記述が薄いという問題点が指摘された（致し方ない点もあるが）。先行研究から引きだしたいくつかのテクニカル・タームの使い方が適切かどうかという疑問も出された。また、「むら」と「邑」という分析的視座についても、むら／邑の連続性よりも相違点が強調されてしまうと、「むら」の閉鎖性という、本論文が批判しているはずの見方に近づいてしまうという問題点も指摘された。ただ、審査での応答で明らかにされたように、これらの問題点は、表現の仕方や重点の置き方に関するものであり、本論文の全体的構想に対する疑義ではなく、これらについて公開審査の場で議論が交わされたことは、本論文の表現を修正し、理論的枠組みを強化するうえで有意義であったと言える。

以上の審査により、審査員一同は、猪瀬浩平氏に博士の学位を授与することが適当であると判断した。